

XCOM2 一英雄の銘一

炎海

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2015年、人類は異星人からの侵略に降伏し、すべての国家は解体された。連立政権『アドヴェント』と大協定締結の元、地球全土はエイリアンの統治下に置かれることとなる。

それから20年が過ぎた2035年、遺伝子治療や地球外の技術により、人類はその庇護のもと復興と繁栄を享受していた。

アドヴェントの私立高校に通う高校生・紫乃菊維摩は、友人とともに政府誕生20周年を祝う式典へむかう。そこで彼が目にしたものは、アドヴェントと反体制派の激しい抗争だった。

反体制組織XCOMとの出会いが、彼の人生を大きく変える。偽りの平和が崩れ去り、少年が残酷な現実へと向き合うとき、世界の歯車が軋みを立てて動き始めた。

真実の果てにあるものは、絶望か、希望か――

目次

| | |
|-----------|----|
| 抑圧の門を砕くもの | 1 |
| 砕かれた英雄 | 11 |
| 氷の盾 | 22 |

抑圧の門を砕くもの

『……本日二十周年を迎える、統一政権『アドヴェント』。その記念式典には、かつてないほどの多くの観客たちが……』

高層ビルの壁面、あるいは公衆広場のモニター。あらゆる映像機器から、多種多様なアナウンサー達の声が街へ響き渡る。人種も性別も問わぬ彼らは、しかし共通の話題で盛り上がっていた。

統一政権『アドヴェント』。かつて地球に飛来したエイリアン『エルダー』との間に結ばれた協定により、人類は全世界統一の政府を誕生させてから二十年。健やかなる繁栄を讃え、アドヴェント政権の祝典が開かれようとしていた。

祝典の開場である第11区画、かつて日本の東京と呼ばれていた場所には、世界中から多くの人々が集っていた。

「うわあ、大きいね……。さっすが世界規模の祝典、目眩しそう……」
「はぐれちゃだめだよ彩葉……。離れたらたぶんもう会えないよ」

そんな金黒茶と様々な山の人だかりの中、二人の高校生が歩いていた。彼らもまた祝典の観客であり、この日を楽しみにしているものである。

「ん、わかってるよ維摩。手、話しちゃダメだよ?」

そう言って少年の手を繋ぐのは、栗色の髪を二つに結んだ、柔らかなような笑みを浮かべる少女であった。名を校上彩葉こうがみいろは、同じ教室のクラスメイトである。その様子に呆れながら、少年——紫乃菊維摩しのあきゆまは苦笑を浮かべた。

「……弘樹達ともはぐれちゃったんだし、もう少し注意して……」

「わかってるって、心配性だなあ維摩は」

くすくすと、どこか嬉しそうに彩葉は笑う。その様子に少し顔を赤らめながら、維摩は少し足早に前へ出る。

「ほ、ほら……。いくよ彩葉。祝典、あと三十分だろ」

「ふふ……。そうだね」

色とりどりの街並みの中を二人は足早に歩いていく。祝典が行われる市内は、観光客のために様々なイルミネーションで飾りつけられ

ていた。エレニウムカーの最新モデル、アドヴェントバーガー、エルダーとの共存を祝う黄金像。その中を縫うように通りながら、彼らは人だかりの中心へと進んでいった。

開場に近づくにつれて、警備も嚴重になっていくのがわかる。遠くの方には検問がしかれており、周囲には多数の兵士たちが目につく。全身を黒い抗弾プレートで包み、顔の半分程までヘルメットで包んだ姿は、維摩達にとっては平和の象徴とも言えるものであった。

アドヴェント兵。彼らはアドヴェントのもつ平和維持軍隊の一員であり、今の地球を守る正義の代名詞とも言える存在である。地球圏の全ての国家が統一されたとはいえ、それでも争いが全て消えたわけではない。旧国家の残党や犯罪者の起こすテロが、未だに世界では燻っているのである。アドヴェント兵の役目はそれらから人々を守り、またテロを未然に防ぐことだ。今のアドヴェントにとって彼らの姿は、安全に不可欠な存在なのである。

「あー向こうに見えてるのって、改築された遺伝子治療施設じゃない？」

「本当だ、式典記念に建て替えたんだっけ？」

彩葉の指差す方向には、アンテナの立つ二階建ての建物が見える。近くによれば、特徴的な二重螺旋を模したモニュメントも見られるだろう。これこそがアドヴェント政権下で発達した医療技術の象徴、遺伝子治療クリニックである。

「私、生まれた頃に身体が弱くてさ、あそこのクリニックで遺伝子治療を受けたことがあるんだ。懐かしいなあ……」

「そうだったね、今じゃ全然そんな風には……。いたたたた!!」
「んー……。誰のことがなんだって？」

突如、抱きつくように彩葉が組ついてくる。そのまま維摩の脇腹をつねると、彩葉は含むような笑みで覗いてきた。そこそこの痛みに抗議しようとするが、その言葉はすぐに飲み込まれてしまった。

「い、彩葉！その……。えつと」

「えー、なにかかな？」

「その……。む……」

胸、と言いかけて咄嗟に口をつぐんでしまう。今の体勢だと、彩葉の豊かな胸が彼の腕に押し付けられるように当たっているのだ。加えて仄かな匂いが維摩の鼻孔をくすぐる。柑橘系の香りは、否応なく維摩に彼女を意識させるのだ。

飲み込んだ言葉を言い出せぬまま、ドギマギとして固まってしまいう固まってしまふ。その様子に気がついたのか、彩葉もさっと頬を上気させた。

「や、えーと……。あ、あはは……」

「い、彩葉。僕……。えつと」

互いに気まずくなり、さっと顔を背ける。祝典の雰囲気もあつてか、今日は妙にお互いのことを意識してしまうのだ。

「あ、あれみてよ!! ニュース、ニュース!!」

おかしな空気を壊そうとしてか、唐突に彩葉は声を上げる。彼女が指差す先には、街頭モニターからニュースが流れていた。

『今日未明、アドヴェント治安維持軍は、パリで発生した遺伝子治療施設爆破テロの容疑で、反政府活動家十四人を拘束しました。調べによりますと……』

「怖いなあ。こっちにも来たりしないよね?」

「彩葉……」

彼女の遺伝子治療は、十六年たった今でも完治していない。未だに定期的にクリニックへ通う必要があり、それなしでは生きていけないのである。彼女が通える範囲の施設がなくなれば、それは生活にまで影響してくる。心配するのも無理はないだろう。

「大丈夫だよ、政府も動いてるんだし。きつとすぐに鎮圧されるって」
そう、きつと大丈夫だ。自分達の日常は、きつと彼らが守ってくれる。維摩も、アドヴェントの住人たちもそれを信じて疑わない。それこそが、今の地球の常識である。

だが、そのときだけは維摩の胸に、言い知れぬ不安がよぎった。それは一時の気のせいなのか、それとも風の流れにのって届いた一声か。ぼそりと呟かれたその言葉は不安で、それでいて決意に満ちたものであった。

「……perfect (そうこなくてはな)」



シテイ街路に建てられたホロ看板が、年季の入った彼の顔を映し出す。作戦を前にしても、ブラッドフォードの顔に緊張の色は無なかった。XCOM (Extraterrestrial Combat Unit 対異星人戦闘部隊) 計画が失敗してから二十年、追撃から逃れ続けた彼の顔には、かつての若造の面影はどこにもない。長い歳月をかけて岩のように皺の刻まれたその顔には、爛々と意思を灯した光が輝いていた。

二十年、世界がエイリアンに侵略されてから十分な月日が経った。逃避行の中で仲間はず々に倒れ、かつてのXCOM計画のメンバーは彼のみとなつている。だが、それも今日で終わりとなる。この作戦が成功すれば、XCOMはついにエイリアンに対して攻勢に出ることができるのである。

「……あと60秒。準備しろ、まもなく時間だ」

アドヴェント公用語ではなく英語、いまの日本では英語を理解できる人間などはいない。それ故、堂々と使ったところで意味を理解できる人間など、まずこの場にはいないだろう。その事実を受ける感傷などもはや存在しない。すでにこの二十年間で捨ててきたものである。

視界の端で影が動く、同じく作戦に参加するレジスタンスのエンジニアだ。作戦の第一段階として、まず自分と彼女がアドヴェントの注意を引く算段となっている。そしてその方法は簡単である。それは……。

(アドヴェントの重要指名手配犯、囷にはもってこいだろう?)

検問に足を踏み入れた瞬間、けたたましい音とともにサイレンが鳴

り響く。予想通り、付近のアドヴェント兵たちがこちらを向いて銃口を向ける。赤い装いの指揮官オフィサーが何事か喚き散らす、聞いてやるほどにひまでもない。そうこうしているうちに仲間たちが爆薬の設置を終わらせる、精神調整を受けている兵士など造作もない。少し突っつけばこそってこちらを向くあたり、扱いやすいものである。

「……やれ」

爆薬を取り付けた戦闘車両が吹き飛び、周りの兵を巻き添えにして炎をまき散らす。その衝撃に兵たちが振り向いた瞬間、その頭部へ強烈な一撃を叩き込む。

「ゲートクラッシュャー、作戦開始だ」



混沌、あるいは荒波とでもいうのが正しいのか。それは突然として起こった。爆発音と共に、突如として起こった混乱は止まることを知らず、波紋のように広がっていった。怒号や悲鳴が飛び交い、我先にと皆が走り出す。それは、時間にして十分ほど前の出来事である。

会場付近に停車していた軍用車両が、何者かによって爆破されたのである。二十周年を迎える式典のその最中でのテロは、集った民衆たちの恐怖を掻き立てるのに十分な効果をもたらしていた。そしてその混乱は、否応なく全ての参加者たちを巻き込んでいった。

「維摩……、待ってーきゃあっ!!」

「——彩葉、彩葉っ!!すみません、どいてください……、うわっ!!」

当然、その混乱は維摩たちにも押し寄せる。押し寄せる人の嵐の中では、すぐにはくれてしまっだろう。押し寄せる波に流され、自分が今どこにいるのかさえ定かではない。こんな状況では、彩葉を探すことなど絶望的だろう。諦めずに彼女の名前を叫ぶが、状況はなおも悪くなる。逃げ惑う人々に突き飛ばされた拍子、頭を強い衝撃が襲った。気が抜けるほどに呆気なく、彼の意識は闇に消えていった。

どれだけ経っただろうか。頭の痛みに目を覚ますと、辺りは静寂に包まれていた。鈍い痛みに苛まれる頭を起こすと、そこは人の気配の

しない大通りであった。平時には車や買い物客で賑わっていたであろう街頭は物静かで、街路沿いのホロ広告だけが、維摩の他に動くものの全てであった。

「痛……。なにがどうなって……？」

ベンチにもたれて立ち上がりながら、ぼんやりとした頭を整理する。自分が彩葉と式典に来ていたこと、騒ぎが起こりその原因がテロであったという話、そして彼女とはぐれたこと。

(彩葉は……、うまく避難出来たかな?)

日も落ち、薄暗くなつた都心は、中心部とは思えないほど不気味に静まり返っていた。気絶していた維摩以外の人間は、とつくに避難したのだろう。まだ焦点の定まらない頭で、維摩は通りを歩き続けた。携帯端末もどこかへ失い、自分が今いる場所もわからない。だが、歩き続けるうちに、明らかにそれと分かる目印が見えてきた。

「ここって、もしかして祝典会場か？」

そこには見上げるように大きな黄金像と、血のような赤で彩られた演説台が据えられていた。無数の人が通つたように荒らされたそこは、テレビでも何度も見た場所である。

(ここなら、平和維持軍と連絡がとれるかも)

予想通り、四肢の黄金像の真下には、アドヴェント兵達が巡回している。中には赤色の戦闘服を身に付けたファイサーも居ることから、それなりの部隊であることがわかる。彼らに頼れば、きつと保護してもらえるだろう。彩葉のことも気になる、平和維持軍に事情を話せば、なにか分かるかもしれない。

だが、なにかがおかしい。アドヴェント兵を見つけたのはいい、場所がわかったことも運がいい。しかし、なにか違和感があるのだ。今彼らに近寄ってはならないような、そんな予感が。

気がつけば、近くのモニUMENTへと身を隠していた。はやく接触すればいいのに、なぜ自分は彼らから離れようとしているのか。だが頭のなかで、自分とは別のなにかが囁いているような気がするのだ。今は不味いと、出ていけば殺されると。しばらく身を隠し、そんな根拠もない考えにかぶりを振る。馬鹿馬鹿しい、そんなことあるわけが

ない。しかし出ていこうとする維摩を押し止めるように、耳を塞ぐような爆発音が響いた。

音の方向へ目をやれば、すぐ近くを白い煙が覆っていることに気がつく。そこは先程まで、アドヴェント兵が巡回していた場所だ。そこでようやく維摩は、自分が何故このような場所にいるのか思い出した。同時、全身からどつと滝のように冷や汗が流れ出す。自分がいまいる場所は、命の保証などどこにもないのだ。そして、それは目の前に分かりやすくあらわされることとなった。

襲撃に気がつき、アドヴェント兵が動き出す。だが、そこを狙うかのように銃撃が起こる。初撃は回避、しかしそこまでであった。続けて放たれた弾丸が黒い防弾プレートを破碎し、兵士の身体ごと肉片に変える。初撃で二人、巡回部隊はほぼ壊滅に近いだろう。銃弾のうち据えられた死体がここから見えないのは、維摩にとってはせめてもの幸運であった。

アドヴェント兵がいた場所の反対方向見ると、そこには四人ほどの人影が見える。身なりからして、アドヴェント兵ではない。ならば誰かは自ずと分かる、この状況で武装した集団などひとつしかない。恐らく最初の爆破を実行したのも、彼らテロリストだろう。彼らを見つけた瞬間、心臓が冷たく飛び跳ねた。あそこにいる者達に見つかれば、きつと命はない。

ベンチから乗り出したテロリストが、生き残ったオフィサーへと発砲する。しかし反動故のブレか、直撃にまでは至らない。その隙を逃さず、オフィサーが反撃を試みる。フラグの直撃により赤色のプレートには幾つもの亀裂が走ってはいるが、構える腕には支障はないらしい。黄金像の基部の陰へ飛び込むと、テロリストに向けて発砲した。

テロリストとアドヴェントが攻防を繰り返す間、維摩は付近のモニュメントに身を潜め、必死に荒い息を殺していた。現実なのだ、全てが現実。教科書やニュースでしか伝えられないようなものが、いま目の前で繰り広げられている。抉るような銃声の一つ一つが、ともすれば維摩にすら向けられかねない。心臓が早鐘をうち、脚は立っているのが怪しいほど震えている。

くぐもったような断末魔が聞こえる。陰から覗くと、真っ赤なプレートに包まれた腕が見えた。そのしたからはドロリとした液体が流れ、腕の主が二度と動くことはない^{と示していた}。その後ろからのぞくヘルメットと、苦痛に歪んだ唇を見た瞬間、胃が急速に縮こまるような感覚を覚えた。

「うっふ……」

喉元まで迫った感覚を必死に押し殺し、その横を見やる。テロリスト達は維摩とは反対方向、エイリアンを象った黄金像へ顔を向けている。今ならば奴等の後ろを通りすぎ、逃げることも出来るだろう。だが、途中にでも見つかつては不味い。相手は銃で武装しているのだ、いくら離れていても、撃たれば終わりである。見つからないように、慎重に移動することが求められるだろう。

一気に物陰から飛び出ると、噴水の影へ滑り込む。ちらりと伺うと、やはり気がついていない様子はない。そうしているうちに再び銃声と爆発音が響き始める。どうやら、他の巡回部隊が合流したらしい。ならば、彼らが気をとられているうちに逃げるのが最善策だ。次の手番を待つて、一目散に噴水を離れる。テロリストは目の前の敵に集中しており、気がついた様子はない。

その様子にほっとすると、道路沿いのホロフェンスを乗り越える。車道沿いに逃げれば、アドヴェント兵の検問へ逃げ込めるだろう。

どれだけ走っただろうか。息を整えながら前を向くと、そこには見覚えのあるシルエットが見えた。アドヴェントの遺伝子治療クリニックだ。外観に違和感があるが、恐らく裏手にでも出たのだろう。ここから演説台まで距離があることに気が付くと、維摩はほっと胸をなでおろした。

遠くの方で地揺れとともに轟音が響き、思わず肩を振るわせる。見ると、遠くの方から黒い煙が立ち上っていた。おそらくテロリストによる爆破だろう。そう思うと、緩んだ気持ちが急速に冷えていった。はぐれてしまった彩葉は無事だろうか。

だが、維摩は未だ己が騒動の中にいることに気が付いていなかった。突如、遺伝子治療施設の壁が爆破され、その破片と爆風が維摩を

襲う。気の抜けていた中に突然のことで、道路に倒れ込んでしまう。頭の中が真っ白になり、正常な判断力が奪われていた。

「あ……、あ、あ、……」

口を開け閉めしながら、アスファルトの上にへたり込む。腰が抜けてしまったからか、動く力すらも出てこないのだ。そうしている間にも煙が晴れ、犯人と思しい人物がやってきた。

初老に近い、厳めしい顔つきの男だ。岩のような顔には、必死さと同時に安堵のようなものも垣間見られる。その肩にはオレンジ色の、体格のわからないスーツを着た人のようなものを背負っていた。男は前を向くと、すぐに維摩に気が付く。殺される、そう身構えた維摩であったが、男は彼を見るなり呆けた顔になって呟いた。

「What?……you are……Why?」

しかしそれもつかの間、後ろからの銃撃が彼をかすめるとすぐに気を持ち直した。彼が何事か叫ぶと、轟音と共にスポットライトのようなものが照らされる。直ぐ上を見ると輸送機であろうものが待機して、ロープを垂らしているのが分かる。施設の中からアドヴェント兵たちが銃撃を繰り返すのに構わず、男はそのロープを手に取った。輸送機が高度を上げ、どんどんと使節から遠ざかっていく。もはや小銃程度では狙いの付かない位置へ逃げ去るまで、維摩は茫然と見上げていた。



この日、レジスタンスは二十年以来初の『人類の前進』を成し遂げた。象徴の奪還は、真実を知る人間たちに希望を与えることとなる。そしてそれは同時に、一人の少年の運命を決定づけるものとなった。紫乃菊維摩はまだ知らない、この日の出来事が全てを変えたことを。己の意志など構わずに、世界の歯車が自分を取り込もうとし始めたことに。

—— 人類を示す戦争は、まだ始まったばかりである。

砕かれた英雄

彼らとて安易に市民を殺したりはしないだろう、家畜は安易に潰すものではないからな。だが腐った林檎は、簡単に捨てられるだろうさ。

——R・タイガン



「うつわ、まじかよ良く生きてたなおまえ」

「……弘樹、いくらなんでももう10回くらいだぞ」

祝典を襲ったテロから約1か月が経ち、維摩の通う私立都史多^{とした}工科高校は今日も平穏に包まれていた。事件は連日報道で取り上げられ、ここ最近はその話で持ちきりであったほどである。世間では新興の犯罪組織や、それに伴うテロの増加が問題視されているが、海一つ（昔は日本海と言ったらしい）離れた列島では静かなものだ。あれ以来、街中では平和維持軍の増設が行われた以外、目立った事件もないのである。身近に事件がなければ忘れてしまうというが大衆であるのだ。

しかし高校生いうのは刺激的な話題を求めてしまう年頃、何かあれば格好の話題の餌食にされるものである。そんなこんなで友人の八部弘樹にもう何度目かという同じ話題を振られ続け、流星に維摩も辟易していた。

「それに君たちもあのときどこ行ってたんだよ。彩葉と一緒に探してたんだぞ……」

「え……、いやーそれはなあ。はははは……」

弘樹は若干の含みと目をそらしつつ、引きつったように笑う。何かを隠しているかのようだが、その真意は良く読めない。しかも強引に話題をそらすように、別の話に切り替えようとしてくるのだ。

「で、彩葉ちゃんどこまで行ったんだよ？」

が武力で抵抗したって話」

「うっわ、話し合いに応じず無抵抗の交渉団を襲撃って、あいかわらず卑怯な奴らだよな」

彩葉が差し出したのは、最近の報道がまとめられたニュース記事であった。アドヴェント政府認可の報道機関から伝えられる文章は、現地の情報を如実に伝えていた。

あの事件以来、各地の反政府勢力が結託し、テロの頻度が高まっているのである。周辺地区では通信インフラの破壊などが行われ、安否確認も取れない地域もあるという。

「でも何なんだろうねー、このXCOMって組織。各地のテロリストたちを急速にまとめているって書いてたけど」

「どうせ陰から嫌がらせするしか能のないやつらなんだろう？正義の見方にやかなわねーって、なあ維摩」

「……あ、うん。そうだね」

弘樹からの振りに、すこし遅れて同意する。反政府組織XCOM、あの事件以降表に現れ、各地でテロ行為を繰り返す犯罪者集団である。アドヴェント政府からはその残忍さが繰り返し強調され、事実起こした事件の中には大勢の死傷者を出すものも含まれていた。その危険性は連日報道されるニュースを見れば一目瞭然だろう。平和維持軍もその活動を危険視しているようで、街中で軍備増設に伴う入隊の呼びかけが行われている。

だが、維摩はなにか引つかかるのだ。祝典のときのあの事件、報道されたのは爆破事件のみであり、遺伝子センターのことは何一つ触れられていなかった。そのことに、すこし疑問を抱いてしまったのである。



その日も授業が終わり、生徒たちは何事もなく帰路についていく。

それは彼らも同じであり、部活のある彩葉以外は早々に帰路へついていた。

「あのさ、実際のところ。いまの社会ってどうなんだろう」

「なんだよ唐突に、政治イキリにでも目覚めたのか？」

都内に建てられた私立校である都史多工は、市のインフラと密接にかかわる場所に建てられている。それ故遠くから通う生徒も少ないのである。とは言えアドヴェント市内では珍しくもなく、遠くの家でありながらも昔からの親友であるというケースも少なくはない。

「そうじゃ無くてさ、ほら最近話題でしょ、反体制派のテロ」

「まーな」

「どうして彼ら、アドヴェントに反対してるのかなって」

実際のところ、アドヴェント政府ができてから人類の生活は格段に良くなったらしい。エレニウム技術の原子力発電に変わるエネルギー革新、遺伝子治療による不治の病の激減、二十年前に懸念されていた食料問題の解決など挙げればきりがなし。アドヴェント政権下で生まれ、その元で育った維摩には、彼らが何を否定したいのかわからないのだ。

「そりゃあれじゃね？よく聞くじゃん『無垢なる世代』って言葉」

『無垢なる世代』、2015年以降に生まれた、二十歳以下の少年少女たちの別名である。アドヴェント政府はこの呼称を差別用語として禁止しているが、戦前（この場合は2015年を境とする）当時の世代には陰でそう呼ぶものも多く存在する。

彼らはそろってこう呼ぶのだ「何も知らない、無垢で愚かな子供」と――。

「でも考えて見りゃ、俺たち当時のことなんもしらねーよな」

「うん、知っているのは大きな騒動があったってことくらいかな」

当時エイリアンの接触したときには、世界中で大きな混乱があったらしい。異星人との共存を認めない大人たちが、執拗に武力衝突を繰り返していたとか。その結果、人類は二十年前に大きな犠牲を払い、その傷跡は今も続いているという。

「戦前は『歴史』って科目があつて、そこで昔のことを学んだって聞い

ことあるな。まあ、アドヴェントに代わってからは廃止になったらしいけど」

「それって、ぼくらが生まれる前の話だろ？」

教育制度も、アドヴェント政権が樹立された後、大きな見直しがあったらしい。昔には『歴史』や『古文』などの風変わりな授業が存在したらしいが、新たに制定された教育制度にのっとり、無駄な教育科目はすべて廃止されていったのだ。政府曰く、『旧来の重荷を捨て、人類のさらなる進化と繁栄を育むため』らしい。

「そうだけどさ……。なんでアドヴェントは『歴史』を捨てたんだろかな」

「え、なんでって。そんなの決まってるでしょ……？」

だが、弘樹が求めている理由は、どうもアドヴェントの公式発表ではないらしい。

「いや、そーじゃなくてさ。ほら、ゲームとかでもそうだけど、攻略本みたいなのがあったら進めるのが楽になるだろ？そういうのにも使えるんじゃないかなー、ってふと思つてさ」

「でも、人生はゲームじゃないだろ。やり直しなんて効かないし、無理があるんじゃないか？」

「そこはほら……。あれじゃん。先にやったやつから攻略法を聞いたりしたら、結構楽になるんじゃないか？」

はたしてそういうものなのだろうか？維摩にはいまいちピンとこないが、弘樹はそのたとえで納得しているらしい。

「そういうものかな？」

「そうそう、絶対そうに決まってるって。そうだ、少し確かめてみよう！！」

なにを思ったか、弘樹は妙に目を輝かせる。維摩の頭に嫌な考えが浮かんだ、こういう時の弘樹は大抵ろくなことをしないのだ。

「なにをさ……」

『歴史』だよ。ほら、先生とかに聞いたら、何か詳しいことを知ってるんじゃないかなーってさ」

気の抜けるなため息が洩れる。

「政府の指導要領ってさ、たしか教えること自体が禁止されてなかったっけ？」

「確かにそうだけど、あれたしか罰則規定とかないだろ。別に減るもんじゃないし、こっさりなら大丈夫じゃないか？」

先生にとつては大きな問題だろうと思うが、維摩は何も言えない。こういう時の弘樹は止められないのだ。そうなれば適当に付き合ひ、弘樹が興味を失い始めたあたりで切り上げさせるのが最善と言えるだろう。

「わかった、じゃあ明日現国の先生にでも聞いてみよう。勿論こっさりよね」

「いよーし！話の分かる親友で助かるぜ!!」

その言葉に苦笑を浮かべる。実を言うとな維摩も、弘樹に言われたことが気にならないわけではないのだ。あの日、祝典会場の爆破事件から、なにか胸の内に小さな疑念が渦巻いているのである。しかし、それを問い詰めてしまえば、もうあと戻りができないような気がするのだ。

明日また、そう言つて弘樹と別れて電車を降りる。いつも通りの風景だ、何の変哲もない自宅の最寄り駅。何時もは帰宅者でざわめいているそのホームが、不気味に静まり返っていた。



どんよりと曇った空が、今にも降り出しそなほどに黒々としている。こういう時は昔の人曰く『雨の匂いがある』らしいが、たしかに何かよからぬ気配がするものである。

駅から学校へ向かう途中、維摩はなんども携帯電話の画面を気にしながら歩いていた。理由は簡単で、弘樹との連絡がつかないのである。電車も今日は同じではなく、タイミングが悪いことこの上ない。

「やっぱり維摩からも繋がらない？」

すぐ隣では彩葉が、同じく携帯を片手に困惑していた。無理もない、あの元気が取り柄調子者が、今日に限っては何の連絡もなく姿を見せないのだ。心配をしない方がおかしいだろう。

「うん、メールにも電話にも反応しない。学校に着ていればいいんだけど……」

しかしその期待とは裏腹に、弘樹は始業のチャイムが鳴った後も、その姿さえ見せることがなかった。担任は彼の欠席の理由を病欠と言っていたが、それにしても連絡の途絶え方が不自然すぎるのだ。

(もしかして……)

ふと、維摩の脳内に昨日の会話がよぎる。しかし、その考えを全力で頭から振り払った。まさか、自分たちの考えはあくまで『考え』だ。まだ何もやってすらもない。

しかしそれは維摩の想像に過ぎない。実際にそれらに違反したらどうなるのかを、維摩はほとんど知らないのだ。まさか……。

そんな維摩の考えを知ってか知らずか、校内放送が教室に響き渡る。

《2年B組、紫乃菊維摩くん―繰り返します―2年B組、紫乃菊維摩くん―来客の方がお待ちです。至急昇降口まで来てください》

名指しで呼び出され、心臓が跳ね上がる。来客、いったい誰であろうか。そもそも今は休み時間とは言え、学校が終わったわけではない。しかし誰が待っていていようと、やはり呼び出しには応じるべきだろう。

昇降口までの廊下が、奇妙なほど長く感じる。廊下横の教室から聞こえる笑い声が、無意味な雑音の壁となって頭を揺らのだ。

果たして、どれだけ長いことかけてたどり着いたのだろうか。いや、自分がそう感じるだけで、実際は五分もしなかったのかもしれない。昇降口前には、当然というべきか数人ばかりの人があった。

一人は見覚えがある、この学校の教師だ。厚い眼鏡にキツめの化粧をした彼女は、それがはがれそうなほどうろたえている。

客人は三人、そして見覚えのある服装をしている。後ろの二人は赤い頭にアドヴェントの防弾スーツを着用し、代表格と思われる男は黒

字に赤のマークが施された制服を身に着けている。血色の悪そうな青白い肌に、猛禽のような細長い目をした男だ。その彼が維摩の姿を見ると、鷹揚に笑った。

「やあ、君が紫乃菊維摩くんだね。私はアドヴェント治安維持局、第十一分室交渉官の、アンドリユー・ローズフェイルといいます。どうかお見知りおきを」

そう言つて笑うローズフェイルの目元は、氷のように冷たくこちらを見据えている。後ろに控える兵士たちも、不気味なほどに沈黙を保っていた。

「ふむ、では先生、少しばかり彼をお借りしてもよろしいですか？」

「え、あ、その……」

「失礼、これも公務でして。学校の方には迷惑をおかけしませんので」「わかりました……」

丁寧な口調とは裏腹に、有無を言わせぬ威圧感を漂わせている。そんなものに一介の教師が耐えられるはずもなく、背を縮こまらせたままその場を去っていった。

彼女が去ると、場を沈黙が支配する。休み時間が終わりを迎え、教室に戻る生徒たちも、兵士の姿を見るとそそくさと逃げ散った。

重苦しい空気を打ち破ったのは、やはりというべきかこの男であった。

「さて、紫之菊維摩。君は三月一日、記念式典の日のことを覚えているかな？」

意表を突いた質問にキョトンとなる。確かに自分はその場所に行った、しかしそれがなにか関係あるのだろうか？

「はい、あの日僕は式典にいました」

「では、事件当時に君はどこで、何を今したか？」

「えっと、事件の場所について。それでテロに巻き込まれてしまつて……。これ、当日も詰所で言いましたよ？」

まさかその事を今になって聞かれるとも思わず、維摩は拍子抜けした気分となる。

「そうですね。では、そのときの君を証明する人間はいますか？」

どういうことだ。彼は何を言っているのか？証明もなにも、あの場所には自分一人しかいなかった。

嫌な汗が頬を伝う。なにか、なにかとてつもなく嫌な予感がするのだ。

「えっと、そのときは友達を探していて……。だからあの場所には自分一人しか……」

「なんと！なら君は君の行動を証明できる者は誰もいないと言うのですね？」

合点がいった、あるいは望んだ答えを得たかのように、ローズフェイルは手を打つ。芝居がかったその様子は、この場においては異様でしかない。しかしその異様さも、笑いよりは不吉さを誘うものである。

「紫之菊維摩くん。君は今自分に、どんな用事があって訪ねられたかわかりますか？」

「いいえ……、なにも身に覚えは」

その言葉を聞くと、ローズフェイルは口元を薄く歪める。その目は獲物を睨むようにも、憐れみを感じさせるようにも見えた。

「ふむ……、ではお答えしましょう。」

——紫之菊維摩、貴殿には現在、アドヴェント平和維持法第二条一項『平和に対する反逆』の罪に問われています。当局からは重要参考人として、速やかにご同行ねがいたい」

頭を殴られたような衝撃とは、まさにこの事を指すのだろう。維摩には彼の言っていることの意味が理解できなかった。『平和に対する反逆』、すなわち目の前の男は、維摩のことをテロリストの同族だと言っているのだ。訳がわからない、自分はテロリストなどとはなにも関係はないのに……。

「な、何かの間違いでしょうか？テロリストなんて、意味が……」
「すでに証言もあがっています。さて、もう逃げられませんかよテロリストさん？」

後ろに控えていたアドヴェント兵達が、瞬く間に維摩を包囲する。手元にはすでに暴徒鎮圧用の電磁ブレードが握られていた。

「待ってください、話を聞いてっ……がふっ——!!」

なおも弁明しようと踏み出そうとした瞬間、背中に焼けるような衝撃が走り、同時に視界が激しく明滅した。それが背中に受けた電磁ブレードが原因だと理解するときには、維摩の身体はタイルの上に横たわっていた。

「……そこまでです、これ以上は命に関わるでしょう。彼を生きたまま確保するのか、エルダーの意思なのですから」

そう言うとローズフェイルは兵士に指示し、維摩の顔を上へ向けさせた。強引に髪を掴まれて持ち上げられると、薄く笑う彼の瞳と視線があう。

「……まったく、戦術チップというものはやっかいですね。いちいちこちらで指示しなければならぬのですから。さて紫之菊維摩くん、まだここでお話をしますか？」

「……なんで、こんな……」

蚊のなくような声で告げられた問いは、憐憫の視線とともに捨てられる。

「さて、時間も押していることですし、早くいきましよう。彼をお連れしなさい」

ローズフェイルの指示を受け、兵士たちが維摩の両脇から抱えて立たせる。学校の外には、アドヴェントの護送車両が待機していた。重たい首を振り向くと、校舎の窓から生徒たちの顔が見える。遠くから

表情はわからないが、きつと自分のことを話しているのだろう。

レーザー式の手錠をはめられ、兵士に引きずられて車両の後部スペースへ押し込まれる。扉が閉められ、灰色の空が見えなくなる直前、ローズフェルトがぽつりとつぶやいた。

「……あなた達は愚かですね。本当に、何も知らない」

氷の盾

「う……、痛つ……」

逮捕される経験というのは、一生のうちそうあるものでもないだろう。特にテロリストとしてならばなおのことである。

維摩が目を覚ますと、そこは知らない部屋であった。三方を冷たい壁で囲まれた、狭苦しい小さな場所だ。意識を失っている間に入れたのであろうそこは、独房の類いに違いなかった。

部屋は小さな便器と寝心地の悪そうなベッドが備え付けられただけの寒々しい造りで、最低限の設備しかそなえていない。

「あの……、誰か……、誰かいませんか!?ここは何処なんですか!?!」

そとに向かって大声をあげるが、反応は何もない。外に出ようにも唯一外界と通じる透明な扉は固く閉ざされ、外には人の気配はない。

目を覚ましたばかりの朦朧とした頭で考えながら、維摩は意識を失うまでの出来事を、思い出せる限りで反芻してみた。逮捕された後、護送車に長いこと揺られ続け、どこか遠くへ運ばれたのだ。降ろされた場所は薄暗いどこかの施設であった。維摩が思い出せるのはそこまでだ、これ以上記憶を辿ろうとしても、頭痛を感じ止まってしまうのである。

「そうか、僕は捕まって……」

犯罪者として牢に入れられた。ようやく頭の中にその事実が浮かび上がってくる。犯罪者という言葉も、逮捕という言葉もどこか現実味がなく、まるで夢を見ているかのようなのである。そもそも自分は犯罪など何一つ犯していないのだ。ならば然るべき措置がされねばならないはずだ。おそらく、自分が意識を取り戻したならば、取り調べのひとつでも行われるだろう。その時にしっかりと抗弁すればいい。

ならば、と維摩の考えに希望が灯った。まだ全てが終わったわけではない。自分はまだ裁判すらも受けていないのだ、ならばここで悲嘆にくれるより、これからのことを考えるべきである。そう考えた維摩は、来るであろう取り調べに備え、頭の中を整理することにした。

しつかりと抗弁すれば、きつとわかってもらえるはずである。そうその筈だ……………。



あれから暫くの時間が過ぎた。巡回に来る監視用兼食事配給用のドローン以外に出会った者はいない。

人間は不安なとき、孤独でいるだけで精神が磨耗するという。それは維摩もまた例外ではなく、その静けさは彼の心もまた蝕んでいった。

初めは軽い強迫観念と不安だった。誰かと話したい、そんな小さなことである。だが、それは時間が経つに連れて肥大化し、彼の心を追い詰めていった。牢の中では独り言が増え、食事にもほとんど手を触れない。気が付くとベッドから立ち上がり、牢の中をふらふらと歩き回っていたのも一度や二度ではないのだ。

一体なぜ何も動きがないのか、そもそも来る人間などいるのか。不安と疑念は時間が経つにつれてどんどんと高まっていく。時計など無く、どれだけ時間が経ったかは正確にはわからない。少なくとも一時間や二時間ではあるまい。

そうして繰り返し返す静寂の中で、もう何度目かわからない独り言をつぶやいていた時だった。それまでドローンと空調の駆動音しかしなかった世界に、新たな音が入り込んできた。それはどんどんと大きくなり、維摩の耳にも判別ができるようになってくる。硬質なセラミックの床を規則正しく叩くそれは、おそらく何者かの靴音であろう。それを理解したとたん、維摩は思わず独房の扉へと飛びついた。

「——あの、この人ですよね!? 僕はどうなるんですか!! 話が見たいんです、ちよつと……………!!」

だが、足音は維摩に気を留めることなく、その隣の独房の前で立ち止まった。必死に扉を叩き、大声で存在をアピールするが、足音の主が気を向ける様子はない。やがて、ガサゴソとなにか作業をするような音とともに、その足音は去っていった。

「そんな……」

足音の消えた後も、しばらくそうやって叫び続けていたが、ついぞその人物が戻ってくることはなかった。そのことに落胆し、維摩はうなだれるように肩を落とす。だがそれは決して、現状に変化が起きなかつたわけではなかった。

「……誰か、そこにいるのか」

くぐもつたように低い、呻くような男の声が聞こえる。その声の元をたどると、すぐ隣の壁に行きついた。どうやら、隣の房に新しい囚人が入れられたらしい。

「うわっ……!? えっと……あの……」

思わぬことに、維摩の口から素つ頓狂な声が出てくる。混乱した頭で出てくるのは、要領を得ない言葉だけだった。

「子供……っ？ やつらが二人も捕虜をとるとはな……」

隣人の声はしわがれているが、老人のそれとは違うだろう。だがその声は、どこかで聞いたような気がするものであった。

「あの……、どこかでお会いたような気がしまするものであった。菊 維摩って言うんですけど？」

つかの間の考えるような声の後、帰ってきた答えはこうだった。

「……いや、聞き覚えは無いな。言語と名前からして日系なのだろう？ 私の知り合いに東アジア出身の者は……。いや、あの時の二人は日本人と中国人か。……それくらいだ。」

「そう……ですか」

何か含みのある言い方ではあったが、やはりというべきだろう。しかし、何にせよ話の通じる隣人がやってきたというのはうれしいものだ。彼の事情を考えれば、手放しに喜ぶべきではないかもしれないが、それでも話し相手というものは必要だろう。

「あの……、あなたは どうしてここに？」

もしかしたら、自分と同じ境遇なのかもしれない。しかし、その答えは維摩の期待していたようなものではなかった。

「どうして……か。そういうおまえは何者なのだ？ どうにも戦士の類ではないようだが……」

どうやら、自分が答えるまでは向こうも話す気はないらしい。維摩本人も誰かに相談したかったこともあり、自分が思っていた以上にすらすらと言葉が出てきた。学生であること、冤罪で捕まったこと、ずっとこの場所に閉じ込められていたこと。壁の向こう側の彼は、時折短い相槌を打ちながら、長いであろう維摩の話をしつかりと聞いていた。

「なるほど……、事情は分かった。つまりおまえは、知らぬ濡れ衣を着せられ、ここに繋がれていたということか」

「……はい。話を聞いてもらおうにも、取り合ってもらえなくて」「やつらはそういうものだ。おまえが言うような方法で連れてこられたのなら、よほどのことがない限り放しはしないだろうよ」

まるで、この状況になることを知っているような口ぶりである。それだけ何か事情に通じているのか、それともそれ意外の何かか……。『おまえが何故連れてこられたのかは知らん。だが、聞く限りでは『確保』していることが重要なのだろうか。でなければ長いこと手が付けられていないことに意味が見出せん』

「確保していること……。それっていったい何なんですか？」

答えは無い。当然だ、彼は当事者ではないのだから、知っているはずもないのだ。だが、その口ぶりはやはり一般人というにはかけ離れている。そして、その答えを維摩はまだもらっていない。

「あの……、それで。さつき聞いたことなんですけど……。あなたは一体……」

いったい何者なのか。その答えは、予想に反して素直に帰ってきた。

「……プラタル・モックス……。今は……。『XCOM』に身を寄せるものだ」



それからは、最善とは言えずともマシな日々であった。話し相手が一人増えただけでも、生活というものは変わるものである。

独房の隣にるのがテロリストの一味であるというのは驚いたが、話してみれば意外と恐れるようなこともなかった。彼自身のことは多くは語らないが、話す内容はどれも興味をそそるものであったのだ。

「……それで、ノブナガンはどうやって窮地を切り抜けたんですか？」
「オダ一族の秘剣『ハラキリ・ブレード』だ。ルーンの輝きがホンノウテンプルを……。いやダークジェネラル・アーケチすらも打ち破ったのだ」

歴史の話を聞いた時も、維摩が全く知りもしなかったような話をしてくれた。すこし誇張しているような気もするが、どれも興味をそえられるようなものばかりである。逮捕された最初の時とは変わって、むしろ楽しいほどだ。

歴史の話が『オダ一族の興亡：ランセイ編』まで差し掛かったころであった。ここ最近で何度も聞きなれた、あの靴音が聞こえてきたのである。

「——ツチー……。無粋な客だ。ユマ、続きは後にするでしょう」
「……は、はい。続き、楽しみにしてます……」

尋問などをしているのか、モックスは定期的に兵士によって連れたいかれるのだ。そのたびに気を失って帰ってくることから、よほど疲

れる内容であったのだろう。一度本人に何をされているのか聞いたところ、『気にするな』の一点張りであった。本当に謎の多い人である。

話のタネは、何もモックスからだけでは無い。彼から維摩へ尋ねるときもある。その話は決まって、アドヴェントのシティでの内容であった。

「……それで、そのアドヴェントバーガーとやらはおいしいのか？」

「はい、注文する時は大体これですし、安定ですね。あとは——」

生活や施設、或いは学校の授業の内容まで様々だ。その内容を話すたびに、「ほう」や「それで？」というように様々な相槌を打ってくれる。話し方から取っ付きにくい印象を持っていただけに、中々に意外であった。

そんなやり取りが繰り返される中であつた。彼ともほどほどに打ち解けた頃である。今なら行けるであろうと考え、彼の過去について問うてみた。

「そういえば、モックスさんってどこのご出身なんですか？」

何気ない質問であつた。彼とは日本語が通じるが、さりとて訛りがそれらしくない。アドヴェント共用語も伝わっていたことから、シティで教育を受けていないということでもないだろう。

「出身……か。そうだな、どう話すべきか……」

だが、その語りは意外に重かった。いや、ためらうこと自体は予想はしていた。しかしこれは、ためらうというより、答えを探しているようである。

「私は、もともとはアドヴェント平和維持軍に所属していたのだ」

「えっ……!!モックスさんが……!!」

意外な答えだつた。彼がアドヴェント軍に所属していたことも、そこから裏切つたことも両方だ。

「どうして……、軍を？」

「意外か……？」

当然だ。維摩にしてみれば、何故アドヴェントに不満を持つのかす

ら理解できないのである。彼の知る限り、彼の政府は完璧なシステムである。そこから出ようなどとは思ったこともない。

「なら、お前はどのようにして信用できる？」

「そんなの簡単です。アドヴェントはあらゆる政府より完璧な統治システムで——」

いつも通りの答えをだす維摩。いつもなら相槌を打つだけのモツクスが、唐突にそれを遮った。

「だが、事実そうではなかった。……完璧ならどうしてお前がここにいる？」

統治が、生産が、技術が……。そう続けようとした維摩を黙らせるには、十分であった。完璧な政府が、完璧でないミスを犯す。濡れ衣など、『完璧』にあつていいものではない。

「えと……。それは、きつと何かの手違いで……」

「なにかの手違いで？ハツ、これだけの時間が過ぎても手違いだというのか？それに、今お前は『あらゆる政府より完璧』といったな、……それは一体どの政府だ？」

「それ……は……」

どの政府かなど答えられるわけがない、維摩はどの政府も知らないのだから。知っているのはただ一つ、アドヴェント政権のみだ。答えに窮する維摩へ、モツクスがなおも問いかける。静かに、だが厳かに述べるそれは、不思議な力強さがあつた。

「答えられはしないさ。ユマ、お前は歴史を知らない。アドヴェントによる統治の真実も、支配者たるエルダーの暴虐も、すべて隠されてきたのだからな」

「隠されてきた……？な、何を言つて……？」

わからない、何もわからないのだ。彼が何を言っているのかも、アドヴェントが完璧でないなどという言葉も、維摩にとつては意味が分からない。当然だ、彼は今まで、『アドヴェントは完璧である』と教え込まれ続けたのだから。

「分からないか？当然だ、お前はまだ何も知らなさすぎる。この世界の真実も、お前たちが崇める神の偽りも、何も知りはしないのだから」

その言葉に、弘樹との会話がよみがえる。

『アドヴェントはなぜ「歴史」を捨てた』

「ユマ、この世界は間違っている。だからこそ我々は戦っているのだ」
牢の外から物音がする。複数の足音、しかしいつもの兵士とのものとは少し違う。バラバラで、しかしどこか人間味を感じさせるものだ。押し殺したそれがどんと近づいてき、やがて牢の前で止まった。

牢の中からも見ることできるその集団は、一様に不揃いな格好をしていた。色も、人種も、性別も何もかも違う。共通しているのは、各々が武器を持っているということだ。

「我々はXCOM、人類最後の希望だ……」



「XCOM……」

それはアドヴェントに敵対する反政府組織、そしてモックスが所属しているというものの名だ。そして、今日の前にいる者たちの名であろう。

「Oh, sir looks fine. Is not it
a supreme squid thing? Besides,
it comes with room service (おう、
モックスの旦那元氣そうだぜ。ずいぶんイカしたスイートルーム
じゃねえか。おまけにルームサービス付きと来てやがる)」

その中の一人、ドレッドヘアにノーズピアスを着けた大柄な黒人が

愉快そうに笑った。英語ゆえに維摩には何を言っているかは理解できない。声が抑えられているのは、ここが敵陣のど真ん中であるからだろう。

「Calm down Gordon. Even if you make a noise, your girlfriend is on your right (落ち着けよゴードン。騒いでもお前のガールフレンドは右手だぜ)」

隣の男が肩をすくめて何かを言うと、三人目のフードの人物がその脇腹をこづついた。どうやら、なにか癪に障ったらしい。

「Don't be joking. I open the key, Monitoring Regards (ふざけてないで。鍵を開けるわ、監視よろしく)」

「Aye, Aye ma'am (へいへい、了解)」

そう言うと、彼女の周りを飛んでいたドローンが牢へ近づいていく。彼女が何か操ると、圧縮した空気が洩れるような音とともに、鍵の開く音がした

「Did you serve you hard, did the call girl of the advent, service? (お勤めご苦労、アドヴェントの世話係はサービスしてくれたかい?)」

「I didn't have a bass room. (バスルームはついていなかったな)」

ゴードンと呼ばれた男が何か言うと、モックスは英語で自信ありげに返した。すると彼はやれやれとばかりに肩をすくめると、こんどはこちらへと向き直った。

「So, what do you do with this, are you a boyfriend? (で、こっちはどうする? あんたのボーイフレンドか?)」

「Leave it to me. (私に任せてくれ)」

そう言うと、モックスは牢越しに維摩へと向き直る。彼の姿を見るのはこれが初めてだ。牢越しに聞く声では歳がいつていると思つて

いた身体は、思いのほかにかつしりとした体躯であった。その全身は白い塗装の戦闘服に覆われ、その顔はヘルメットにより覗くことではきかない。

「——ユマ。お前の眼で、この世界を見てみる気はないか？」

「この世界を……？」

そう言うと、彼は自分の顔を覆うヘルメットを外した。その瞬間、維摩の顔が僅かに恐怖に引きつる。そこにあったのは、人間の顔ではなかった。

「ひっ……!!」

「これが、アドヴェントの真実だ」

その顔は、およそ人間とは呼べぬものであった。顔の造りこそ人に近いが、致命的に異なると断言できる。頭髪はなく、頭蓋には奇妙な文様。鼻は爬虫類の様につぶれ、逆に両脇の眼は異様に肥大化している。今までに言葉を交わしていなければ、見ただけで恐怖に陥るほどの凶相だ。

「こ、これって、いったい……」

「アドヴェント兵は皆、私と同じ貌をしている。改造を施された、人外の印だ……」

知らない、こんなもの維摩の記憶にはない。混乱する彼を引き戻す様に、モックスは静かに語り掛ける。

「直ぐに賛同してくれなどは言わない。だが、ここを出るなら今が最後の機会だ。」

ユマ——」

「——我々と、来てみる気はないか？」



「Son of a bitch! Why did it happen!! (あー、くっそ。なんでこうなりやがった!!)」

ゴードンが忌々しげにわめきながら、その手に持ったグレネードランチャーに爆弾を込める。打ち出したそれは巡回のアドヴェント兵を壁ごと吹き飛ばし、その抗弾プレートを粉々に砕いた。

「Sit!! Thomas go!! (畜生!!トマス、止め頼む!!)」

「OK! (まかせな!)」

トマスという名の男が前に出ると、よろめく兵士に向けて素早く拳銃を抜き放つ。獲物が我に返るより早く叩き込まれた銃弾は、その頭蓋を粉々に叩き割った。

「Oh, after all it's going to be like this (あーあ、結局こうなるのかよついでねえ)」

「: : : If it does twice, it will become a fossil stone (…二回もやれば流石にばれる)」

フードを目深にかぶった女性が、陰気そうに英語で呟いた。彼女の名は『エリフ』というらしい。英語に関してはさっぱり。維摩には、彼らがどんな会話をしているのかはわからないが、少なくとも喜んでいないのだけは理解できる。

彼らに領き、牢から出してもらったのは良いものの、どうやら警報装置に引っかかったらしい。現場指揮をしているらしいトマスが、耳に着けたイヤホンをしかめっ面で聞いていた。様子を見るに、やはり想定外の事態らしい。

「あー、あんたは日本語なら話せるのか?」

「は、はい。トマスさんこそ日本語、話せるんですか?」

これには維摩も驚いた、この中で日本語が話せるのはモックスだけだと思っていたからだ。

「班長以上はそれなりにな。あー、わかるならそのまま我らが指揮官殿の言葉を伝えるぞ。『気にするな』だよ」

そういうと、彼は爆破された穴から外へと出ていった。なんでも、

隊員が警戒した後かっついていけとの指示である。彼らの索敵が終わるまでは、施設の中に待機である。爆破された隙間から、肌寒い外気が洩れる。今は春なのに、それにしてもやけに寒い風である。まるで冬に戻ったかのようなようだ。

気を使われていることがわかり、さつと顔を伏せる。モックス一人なら気が付かれずに脱出できたのに、この事態になったのは維摩の牢の鍵も開けたからだ。今の言葉は、自分を責めるということだろう。だが、そうやってここから逃げるのだろうか……。

外に敵がいらないのを確認したのか、トマスがハンドサインを送ってくる。壁の割れ目から外に出ると、維摩は思わず肩を振るわせた。

「痛ったあああああああああああああッ!!」

外に出た瞬間、極寒の風が彼の肌を切りつける。息をすることには鼻腔が痛くなり、一瞬で手足の先がかじかんでいく。日本の冬とて、ここまで寒くはあるまい。もはやその温度は寒いよりも痛いほどである。

「ど、どどどどどこなななんんんでででででで!!!」

寒さで呂律すら回らない。その問いにトマスはさらっととんでもない答えを返した。

「ん?どこって新北極だが?」

「へ?はあああああああああああ?!!」

新北極。地球の最北、北緯66度33分以上の極寒の地である。防寒着を着けていても寒く、ましては学生服一つで歩くなど自殺行為の場所だ。遠くに来たとは思っていたが、流星にこんなものは予想外である。

「なんだ、知らなかったのか?」

「知りませんよ!」

「はは、なら出所祝いのサプライズだな」

サプライズレベルではない、命に係わるレベルである。それは彼らも当然わかっており、予備であろう上着を渡される。

「そう長いことこの中を行軍したりはしないさ。すぐに迎えが来る」
「た、助かります……」

上着の前を閉じ、風が入ってこないよう留める。一時凌ぎでしかないが、トマスの言う『迎え』まで持てばいいのだ。しかし、安堵したのもつかの間、ゴードンが怒鳴り声をあげる。

「Head down !! (頭下げてる!!)」

何を言っているのかわからずぽかんとしていると、後ろから伸びてきた手に頭を掴まれる。そのまま強引に頭を下げさせられるのと同じ時、後ろの床が硬質な音とともに砕けた。

「——ヒッ!!」

「ぼうつとするな、死ぬぞ!!」

いつの間にか、隣にはモックスがしゃがみ込んでいた。既にヘルメットをかぶりなおしているが、どうやらまだ戦える状態ではないらしい。維摩と同じく隊員たちに囲まれるように移動している。維摩の命を救ってくれたのは彼の様である。

「あ、ありがとうございます——」

「move move move !! (行け、行け、行け!!)」

感謝を述べるまもなく、トマスが事前に聞かせた、『走れ』のハンドサインを送る。停車していた兵員輸送車の横まで駆け抜けると、遠く空の方から轟音が響いてきた。

「な、なにが……」

「Reinforcement !! (増援だ!!)」

空を見ると、黒い輸送機がすぐそこまで来ていた。扉が開き、中から兵士たちが顔を出す。一人は初めて見るが、もう一人の装備には見覚えがあった。アドヴェントスタンランサー、近接戦を主兵装とするタイプである。

地上の方へ視線を戻すと、外を巡回中であつたアドヴェント兵が戻ってきたらしい。おまけに施設の防衛システムが動作し始めたらしく、固定銃座があちこちで起動し始めていた。

「か、囲まれちゃいましたよ!!」

しかし、隊員たちに焦りはない。むしろ、焦っているのはアドヴェント側である。兵士たちが配置につこうとする隙を狙い、トマスが移動の指示を出す。

「スモークの場所まで走れ!!降り変えるな、g o g o g o g o

!!!! (行け、行け、行け、行け!!!!)」

言われた通り、全力でその場所まで疾走する。遮蔽物から出てしまえば格好の的だが、いまは気にする必要はない。そしてその場所までたどり着いたとき――。

「――ユマ!!」

こちらに伸ばすモックスの手を、全力で握りしめた。その瞬間、力強く引つ張られるのと同時に、全身が浮遊感に包まれた。否、浮いているのだ。下を見ると、追いかけてくるアドヴェント兵がどんどんと遠ざかっているのがわかる。やがてそれも、施設全体を見渡せるような高度になると見えなくなっていく。さらに引つ張られ、足場へと引き上げられる。どうやら、維摩たちをひっぱっていたのは、小型の輸送機から伸ばされたロープであつたらしい。

暫く茫然とし、やがて身体中にとつと疲労感が襲い掛かる。自分が今まで命のやり取りの最中であつたこと、死の隣にいたことが今になつてのしかかつてきたのだ。

「お疲れさん」

トマスが水筒を差しだしてくる。震える手でつかもうとするが、上手く指が動かない。手に取ろうと身を乗り出すと、そのままバランスを崩して倒れてしまった。

モックスが慌てて助け起こそうとするが、緊張の糸が切れたせいで維摩の身体は床に突っ伏したまま動かない。そのまま彼の意識は、深い闇の中へと落ちていった……。



「う……、あれ……？」

重い瞼を持ち上げると、どうやら誰かに抱えられていることがわかった。どうやら、気絶したまま肩を支えられて運ばれているようである。

「目が覚めたか、どうしたかと驚いたぞ……」

「モックス……さん？」

どうやら、運んでくれていたのは彼らしい。つくづく迷惑をかけてばかりである。そうして少し余裕ができると、あたりを見渡すことができるようになった。

狭い輸送機の中ではない。夕焼け空が見えることから屋外であろう。足元は土ではなく、金属製の武骨な床であった。

「……は……？」

いったいどこなのか、モックスに尋ねようとしたが、彼はその問いに反応することはなかった。かわりに、正面をじっと見つめている。周りの隊員たちも皆同じか、それ以上であった。敬礼する者や、ぽかんと呆ける者、その反応は様々だ。

いったい何があったのか。彼らの見つめる先を追うと、一人の人間がいた。夕日が逆光となつてすぐにはわからな方が、だんだんと近づくとつれてその容貌があらわになってきた。

二十台後半であろう容貌の、背の高くスラっとした体型の女性だ。風にたなびく白い髪や、同じく陶磁器のように白い肌の色をみれば、西洋系のようにすら思える。しかし、その瞳や顔の造形は、どちらかと言えば日本人に近いものであった。

「司令官直々にお出迎えとは、今日はお赤飯つすかね？」

トマスがおどけた調子で笑う。しかし、その瞳には侮った様子はなく、むしろ微かに畏敬の念すらあった。

「フッフ、たまにはいいだろう。美人上司がお出迎えというのも、粋な計らいだと思つてな」

そう返すと、こんどは維摩達へと視線を移した。

「生きててよかったよ、モックス。それと、そこの少年が例のボーイス

カウトかい？」

「あ、えつと……」

あいさつか、助られたお礼のどちらを先に言うべきか迷っていると、司令官は大股で維摩の方に迫ってきた。そのまま彼の目の前に立つと、じつとその黒い瞳で見据える。

「……………」

「えつと……」

品定めだろうか？ 維摩と視線を合わせたまま、彼女は目線をそらさない。やがて、ふつと表情を柔らかくすると、右手を差し出してきた。

「ようこそ、XCOM本部アヴェンジャーへ。私がこの船の、そしてXCOMの指揮官……ということになっている蓮上はちすじょう弐魚になだ。まあ、気軽にニナとも呼んでくれ」